

江戸



背景

高知県の波介川に関する史料によると、川底を「寸志夫」で掘るという記録が残されています。寸志夫とは、自発的に無償で仕事をする事です。今日で言うところの「ボランティア」です。藩政期の波介川では、川の水はけを良くするために、村人たちが自発的に川底を掘る作業を行っていました。その村人の熱意は藩を動かして、波介川の改修につながりました。

アクセス 波介川水門 (波介川)

- 波介川は仁淀川大橋より南へ直線距離約500m
- 土佐市用石
- 緯度経度 北緯33度29分23秒, 東経133度27分10秒



文政一一年(一八二八)、土佐市周辺は大洪水に見舞われました。村の人々は庄屋を中心に話し合い、波介川の水はけを良くして、洪水による被害を少なくするために、川底を掘る作業をすることにしました。藩からの命令ではなく、村人が自分たちの意志で自発的に作業に参加したので、「寸志夫」と呼ばれています。この時に村人が川底を掘ったのは、初田と出間の二ヶ所でした。これは、波介川の全長から言うと、ごく部分的なものでした。しかし、これ以降、村人は村を水から守るためには藩に頼るだけでなく、自分たちも応分の協力をしようというようになりました。

「寸志夫」を実行するために見事な組織が作られていました。村々に差配役が組頭級から選ばれて、銀、米、その他の調達をしました。責任者の庄屋は現地に詰めました。また、監督に来る郷廻の役人の接待から祈禱のための神官や僧侶の接待、さらに角力場の設置、角力取りの宿割りからはじまって警備まで行き届いていました。経費については、地主、富裕層が負担していました。

封建社会の中で人々は忍苦を強いられながらも自覚を高めていたのです。このような村人の熱意が藩に届かないはずはありません。その後、藩による波介川の改修工事につながるようになりました。

